

第VIII部

否定(1) 時空否定

日本語構造伝達文法では構造モデルと時空モデルの2種類のモデルを設定している（「まえがき」参照）。この第VIII部においては否定を時空モデルで扱い、次の第IX部において否定を構造モデルで扱う。

第22章では、「否定」とは「語の示す概念によって満たされるはずの時間と空間が空(から)であることの認識」であるととらえ、これを図示する。

第23章では、否定の時間的側面を図示し、「している」の否定に「していない」と「しないでいる」の二形式があることを確認する。

第24章では、一見非合理と見える日本語否定形式が省略(省力化)によって生じたものであるととらえ、その背後に論理性が貫いていることを確認する。

第25章では、「ご飯食べた？」への否定回答のあり方について考える。

第22章

否定は時空を空にする

22.1 「ある」と「ない」

人間は存在する物体を見ることができる。目の前に箱という物体が存在していれば、その箱は見ることができる。もし、その箱をそこから取り除けば、その箱は見えなくなる。

ところで、その箱をそこから取り除いたとき、その箱の占有していた「空間」はどうなるであろうか。箱がなくなるのに応じて、そこからその空間もなくなるのであろうか。否、なくなりはしない。その空間そのものは依然としてそこにある。

人間にはその空間そのものを除き去る力はない。人間の認識から空間の感覚を取り除くことは不可能である。(カントは「空間という純粹直觀は、感官や感覚などの対象が実際に存在していなくても、我々の心意識における單なる感的形式として、ア・プリオリ(先天的)に成立するのである。」と言いう¹。)

人間は、ある物体がそこに存在しているときには、その物体を見る。その物体がそこに存在しなくなったときには、その物体そのものの代わりにその物体の占有していた空間を直觀する。

とすれば、「ない」というのは、こういうことになる。つまり、「ある」で占有されるべき空間が、「ない」では占有者なしに空(から)の空間のままである。

*1 Immanuel Kant『純粹理性批判』(上)(篠田訳・岩波書店) [I 先驗的原理論] の
[第一部門 先驗的感性論] p.87参照。

で直観されるのである。「箱がない」というのは、「箱がある」場合に箱によって占有されるべき空間が、空の空間のままで直観されることである。

人間の知覚システムから見ると、「箱がある」では、箱の占有すべき空間は箱によって満たされるが、「箱がない」では、その空間は空になる。

このことを図22-1,-2のように図示する。図では、満たされている空間を実線で示し、空である空間を点線で示す。

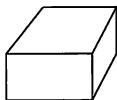


図22-1 箱がある

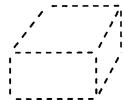


図22-2 箱がない

22.2 空間における「肯定」と「否定」

「ある」は肯定、「ない」は否定である。それで、肯定と否定に関してこういうふうに言うことができる。「箱がある」という「肯定」は、「箱」という概念の指し示す物体が一定の空間を占有するものとしての認識であり、「箱がない」という「否定」は、「箱」という概念の指し示す物体が一定の空間を占有しないことの認識である。つまり、「肯定」では、概念によって設定される空間が満たされ、「否定」では、その空間が空になる（図22-1,-2参照）。

22.3 「空間」と「時間」

今、ここに白い箱が置かれているものとしよう。次に、この白い箱を取り去り、今度はその代わりに形も大きさもまったく同じ赤い箱を置いたものとしよう。このとき人間は、同じ場所に、まず白い箱があり、次にこれが赤い箱へと置き換えられたものと認識する。人間は白い箱の置かれたことと、赤い箱の置かれたこととの二つの事態の生起の関係を時間的な先後の関係の中でとらえる。同じ場所では、ある事態が先に生じ、その後で別の事態が生じるものととらえる。まったく同一の空間ではあっても、そこには時間が流れているわけである。人間は事態を時間の中において認識している。

この時間の感覚を人間から取り去ることはできない。人間はどんなに努力しても、白い箱と赤い箱が同時に同じ空間を占有していることを認識することはできない。田中さんという人が占有している同じ空間を、川上さんという別の人気が同時に占有していることは認識できない。一方の生起が先であり、他方の生起が後である。

このように、同一の空間ではあっても、人間にとってはその空間は時間を伴っているので、空間は一瞬ごとに新しい空間になっている。(カントは「現象を時間から除き去ることは格別むつかしいことではないが、しかし現象一般に関して時間そのものを除き去ることは不可能である。」と述べ、「空間」同様「時間」も「ア・プリオリ(先天的)に与えられている」「感性的直観の純粹形式である。」としている^{*1}。)

人間の認識には空間と時間という二つの直観の形式が先天的に備わっているのであり、現実の物体や事態は空間と時間という制約のもとに人間に知覚されるのである。言語は当然この事実を反映することになる。

22.4 時間における「肯定」と「否定」

「川上さんθ:本を読む^{*2}」という出来事が生起する場合、この出来事はもちろん空間の中で生起するのであるが、同時に時間の中でも生起する。

空間の中での生起としてとらえる場合には、本を読む行為をする川上さんが一定の空間を占有しているものとして認識できる(図22-1参照)。否定の場合(「川上さんθ:本を読まない」)は、本を読む行為をする川上さんが一定の空間を占有しないものとして認識できる(図22-2参照)。

時間という形式においての肯定と否定も、これに準じたものになる。

「川上さんθ:本を読む」という行為が、例えば、未来である今夜8時から9時までの、1時間という時間をかけての行為だとすれば、川上さんの時間

*1 Immanuel Kant『純粹理性批判』(上)(篠田訳・岩波書店)【I 先驗的原理論】の
[第一部門 先驗的感性論] pp. 97-98 参照。

*2 「川上さんθ:本を読む」で使用されている「θ」は「ゼロイチ」主格詞(2.2参照)。

の流れの中で、その1時間という時間は「読む」という行為によって占有されるはずであり、このことは図22-3のように図示できる。

これを否定して「(今夜)川上さん**の**本を読まない」にすれば、その時間は読むという行為がなくなるのであるから、その時間は読むという行為に関しては空になるはずであり、これは図22-4のように図示できる。

(時間の場合の図示においても、空間の場合の図示にならって、行為等の出来事によって満たされる時間を実線で、空である時間を点線で示す。)



図22-3 本を読む

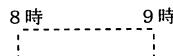


図22-4 本を読まない

「本を読む」という「肯定」は、「読む」という概念の指示する行為が一定の時間を占有するものとしての認識であり、「本を読まない」という「否定」は、「読む」という概念の指示する行為が一定の時間を占有しないことの認識である。つまり、時間での認識においては、空間での認識に似て、「肯定」では、概念によって設定される時間が満たされ、「否定」では、その時間が空になる（図22-3,-4参照）。

22.5 判断の空間的側面と時間的側面

あらゆる出来事は空間と時間という制約のもとに人間に知覚されるのであるから、人間の判断には空間的側面と時間的側面があるわけである。

「川上さん**の**本を読む」という判断においては、川上さんが「読む」という行為をなしつつ空間を占有し、かつ時間を占有している。

では、判断の中で、空間的側面と時間的側面は同じようなシステムを持っているのであろうか。実は、これは異なるようである。

まず空間的側面から考えてみる。川上さんがいま本を読んでいることについての私たちの判断は、位置関係によって形が変わるであろうか。例えば、川上さんの本を読んでいる現場（川上さんのすぐそば）で判断する場合と、隣の部屋で判断する場合と、あるいは、10km離れたところで判断する場合とで

は、言い方が変わるであろうか。否、変わりはしない。どこで判断しても「川上さんの本を読んでいる」という形になる。判断の形は基本的に同一である。つまり、空間のどの位置からの判断であれ、判断の形に変化は生じない。否定に関しても特に変化はなく、単にその空間を空にするだけでよいはずである。

ところが、時間的側面では事情が異なっている。判断時にすでに終了している行為であれば「読んだ」という判断になるし、判断時以後になされる行為なのであれば「読む」という判断になる。また、行為中をとらえるのであれば「読んでいい」という判断になる。つまり、行為に対しての、時間のどの位置からの判断であるのか、行為のどの局面をとらえての判断であるのかによって、判断の形が異なるのである。したがって、否定も、時間のどの位置からどの局面を否定するのかによって、判断の形が異なるはずである。

次の第23章において、否定の時間的側面について考えてみたい。

テンスとアスペクトの関係は2桁の数で簡単に表せる？ → p. 155

「ある」と「いる」の違いは何？ → p. 161

「象は鼻が長い」って、主語が2つある？ → p. 174

「私は故郷がなつかしい」って、主語が2つある？ → p. 190

「彼女が好きな彼」って、どっちがどっちが好き？ → p. 191

「ボクはお金がいる」って、主語が2つある？ → p. 193

「私は水が飲みたい」って、主語が2つある？ → p. 195

「飲んだ？」過去なのになぜ「いや、飲まない」？ → p. 211

「もう食べた？」「いや、食べなかつた」は変？ → p. 215

主語の否定は8種類にも区別できる？ → p. 224

第23章

否定の時間的側面

23.1 否定は、図では点線で、数字では[否]をつけて

第17章の図17-1の出来事は実線で描いてあるので肯定の図である。否定の図は点線で描く必要がある(22.4)ので、それを図23-1のようにする。

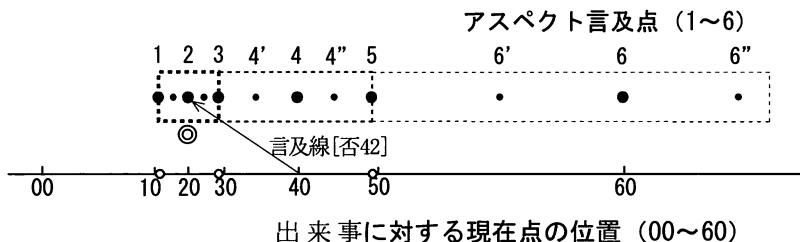


図23-1 現在点と言及点の位置関係(否定)

否定の場合も時間的関係を数字で表すことになる。ただし、肯定の場合と区別するために、否定の場合には[否]をつけることにする(否があれば点線図示、なければ実線図示となる)。◎は局面ではなく、出来事そのものを意味するので「～しない」を表すことになる。

いくつかの言及線を例示してみる。

[否0◎] (明日は本を)読まない。

[否02] (明日の午後は本を)読んでいない。

[否04] (午後は着物を)着ていない。

[否06] (来週ではまだ着物を)着ていない。

[否11] (今から着物を)着ない。

[否22] (今は本を)読んでいない。

[否33] (今まで本を)読んでいなかった。

[否4①] (さっきは着物を)着なかつた。

[否42] (さっきは本を)読んでいなかった。

[否44] (今は着物を)着ていない。

[否55] (今まで着物を)着ていなかつた。

[否62] (田中さんが来たときは、本を)読んでいなかつた。

[否6①] (きのうは本を)読まなかつた。

[否64] (田中さんに会ったときは、着物を)着ていなかつた。

[否66] (田中さんは、去年はハワイへ)行っていない。

否定の場合には、現在点30や50(実行していれば完了するであろう時点)を特定することがむずかしい。それで、[否32]は[否42]や[否62]と同じようになり、[否54]は[否64]と同じようになる。

[否32] (さっきは本を)読んでいなかつた。

[否54] (田中さんに会ったときは着物を)着ていなかつた。

しかし、現在点30や50を意図的に現在とし、言及点3と5にそれぞれ言及することはある。上例[否33][否55]がそれである。

23.2 同じ動詞でも、図は肯定と否定で独立

肯定と否定の共存するような文もある。

「1時から2時まで本を読んでいた[62]が、2時半には読んでいなかつた[否62]。」

このような場合の図示は図23-2のようになる。「読む」という動詞は同じでも、肯定と否定では図は別々になる。

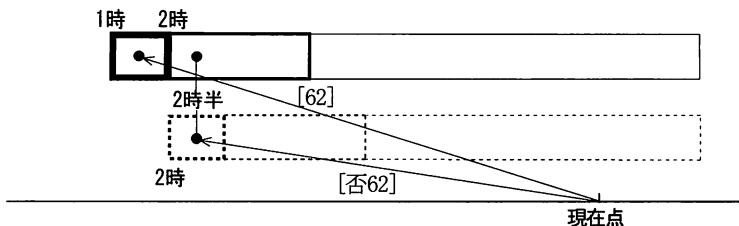


図23-2 同一動詞でも、1時から2時までは肯定、2時半は否定

ところで、図23-2によって、2時半という言及点では、「読んでいなかつた[否62]」という否定が成立する一方で、「読んでいた[64]」という肯定が成立している。それで、次のような一見矛盾する表現も可能であることが理解できる。

「2時半に突然、試験をするから入室するように言われた。そのときには読んでいなかつた[否62]が、もう読んでいた[64]ので、いつテストをされても大丈夫だった。」

このように、2時半には「読んでいる」と「読んでいない」の、一見相反する判断が両立している。これは肯定と否定の「読む」を別個に扱ってはじめて説明のつくことである。同じ動詞ではあっても、肯定と否定とでは図は別々に扱う必要があるわけである。

23.3 「している」の否定は二通り

「している」の否定には二通りある。例えば、「読んで いる」の否定は「読んでない」と「読まないでいる」の二つである。

この二つの否定を区別するために、「読んでいない」の形の否定を「していない否定」、「読まないでいる」の形の否定を「しないでいる否定」と呼ぶことにする。

形式的には、「していない否定」(読んでいない)では、全体(読んでいる)を否定し、「しないでいる否定」(読まないでいる)では、動詞(読む)を否定してから「ている」をついている。

これに関して、次の①、②を指摘しておきたい。

①「仮想開始前否定」と「仮想開始後否定」の対立

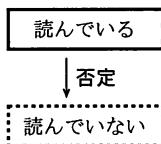


図23-3 していない否定

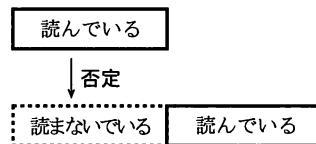


図23-4 しないでいる否定

両者の相違は図23-3、-4のように図示することができる。「していない否定」が「読んでいる」をそのまま空にするのに対して、「しないでいる否定」は「読んでいる」相当部を空にするだけではなく、「読んでいる」を事後に送る。

つまり、この両者は否定する局面が異なっている。「していない否定」は、開始されたものと仮想される出来事のそれぞれの局面を否定する（図23-1 参照）。一方、「しないでいる否定」は、局面が出来事開始に至っていない（読むことを始めるに至っていない）ということを表明する形で出来事を否定する。

基本的に「していない否定」が出来事仮想開始「後」の否定であるのに対し、「しないでいる否定」が出来事仮想開始「前」の否定であるととらえることができる。いずれの場合にも出来事は発生していない。

それで、図23-1に図23-3、-4を加味して、図23-5を作成することができる。

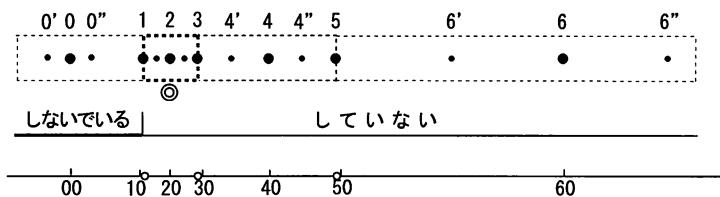


図23-5 「しないでいる」対「していない」

ここで、アスペクト言及点0が付加されることになる。言及点0は出来事開始前の局面にある。

「しないでいる否定」は基本的には[否00]と[否60]の言及線をもっている。([否66]もあるが、これについては後述②参照。) [否00]であれば「読まないでいる」であり、[否60]であれば「読まないでいた」となる。

また、次の例のように、ある同一の状況を「していない否定」と「しないでいる否定」の両方で表現することができる場合がある。

[否00]対[否22]

[否00] 今は見るべき番組もないので、テレビを見ないでいる。

[否22] 今は見るべき番組もないので、テレビを見ていない。

[否00]対[否44]

[否00] 友人と一緒に見ようと思っているので、その映画は見ないでいる。

[否44] 友人と一緒に見ようと思っているので、その映画は見ていない。

この後者の[否00]対[否44]の関係を図示すれば、図23-6のようになる。

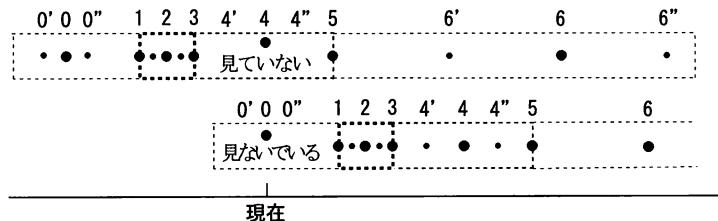


図23-6 [否00]見ないでいる 対 [否44]見ていない

「しないでいる否定」と「していない否定」のいずれもが可能であるような場合は、どの局面を否定する形で表現しようかという、話者の意図のありかがその選択を決定する。ニュアンスとしては、前者であれば「実行しない意志」が、後者であれば「すでに生起している／したと予想される出来事が実はまだ生起していないのだという気持ち」が感じられることがある。

②「しないでいる」にも「結果局面<記憶>」がある

[否66]対[否66]もあるはずである。

[否66] 祖母は当時、その少年の手記を読まないでいる。

[否66] 祖母は当時、その少年の手記を読んでいない。

しかし、図23-5からは「しないでいる否定」の[否66]の存在が読みとれない。図23-5にはまだ不足があるようだ。そこで、「しないでいる否定」について別の角度から考えてみることにする。

「読まないでいる」は形式のうえから見ると、「読む」ことについては否定だが、「読まない」ことについては肯定である。肯定とはいっても眞の肯定ではなく、「みかけの肯定」である。しかし、たとえみかけの肯定であれ、肯定であるならば、出来事として扱えるはずである。第13章、図13-2のアスペクト原則図に当てはめて考えてみたい。

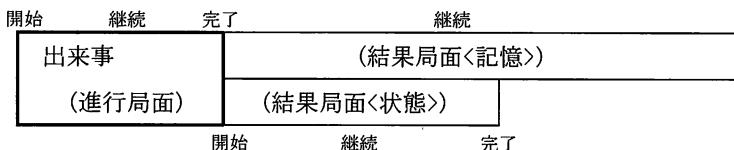


図23-7 アスペクト原則図(この原則図の中の諸局面は、出来事そのもの以外は「～ている」の形で表される。)

今、擬似的にではあれ「出来事」に当たるのは「読まない」である。「進行局面」に当たるのは「読まないでいる」である。特に問題はない。

「結果局面<記憶>」に当たるのは「読まないでいる」である。これは上例のように、また次例のように、成立する。

[否66] 父は学生時代には中国語を勉強しないでいる。

以上、出来事そのもの・進行・結果<記憶>の3つの局面は、疑似出来事「読まない」を用いて表すことができる。

では、「結果局面<状態>」はどうだろうか。

「結果局面<状態>」というのは出来事完了の結果生じる状態である。「着

る」なら「着る」行為の完了した「着ている」という着衣の状態である。「読む」なら「読んだ」ことによって知識が頭の中に入った「読んでいる」状態である。

それでは「読まない」ことが完了することで、「読まないでいる」で表現できるような何らかの状態が発生するだろうか。出来事の「ない」状態から何らかの状態が発生することは非常に考えにくい。(そもそも、「読まない」ことが完了するということは「読む」という出来事の開始することである。)

たとえある「読んでいない」状態が発生したとしても、それは進行局面の「読んでいない」と区別がつかないであろう。

つまり、これが見かけの肯定の限界である。みかけの肯定では「結果局面<状態>」が成立しにくいのである。

そこで見かけの肯定は、「結果局面<状態>」の部分を抜いて、図23-8のように描くことにする。

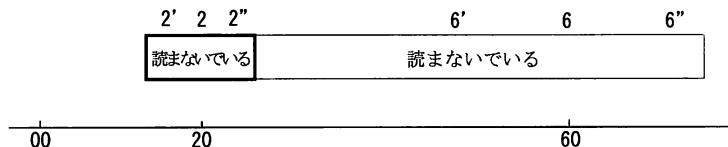


図23-8 見かけの肯定「読まないでいる」

「見かけの肯定」は補助的な考え方であり、「しないでいる否定」はあくまでも否定である。しかし、この「見かけの肯定」という考え方を用いることによって、「結果局面<記憶>」の成立を説明することができる。

そこで、図23-5を図23-9のように補訂することにする。()に入れて「しないでいる」を補うのである。これは〔否66〕「結果局面<記憶>」の可能性を図上に示すものである。この図23-9を否定の基準図としたい。



図23-9 否定の基準図

この図23-9を得たことによって認識の時間的側面を否定する際の時空モデル（「はじめに」参照）が得られたことになる。

それでは、次章において、一見非合理にみえる時間表現が実は合理的に説明のつくものであることを、このモデルに基づいて示してみたいと思う。

学校文法の品詞との対比

学校文法（表層文法）で設定しているカテゴリーは、構造伝達文法では次のように扱う。

- 動詞 → 動詞
- 形容詞 → 形容詞（「形容実詞」 + 「. k-」）
- 形容動詞 → 実詞 + 「に」， 実詞 + 断定基
- 名詞 → 実詞
- 副詞 → 実詞（「と・に・θ₂」格に置かれたもの）， 他
- 連体詞 → 実詞 + 断定基， 他
- 接続詞 → 接続基（本書では扱わない）
- 感動詞 → 全体描写詞
- 助動詞 → 助動詞（3つだけ）， 態詞， 否定詞， 断定基， 他
- 助詞 → 格詞， 相対化描写詞， 実体間描写詞， 他

第24章

過去・現在指向の未来形

24.1 過去・現在指向の未来形「しない」「しません」

「しない」「しません」は「する」「します」の否定である。「する」「します」は未来を表す形式なのだから、「しない」「しません」も未来を表す形式であるはずである。

あした、私はお酒を飲まない／飲みません。

確かに未来を表している。一方、過去や現在には用いることができない。

*きのう、私はお酒を飲まない／飲みません。（文脈なしでは非文）

今、私はお酒を飲まない／飲みません。

（「今」とはいっても、現在ではなく直近未来の文になる）

しかし、次の24.2～3のように「しない」「しません」が過去や現在を表すのに使用されているようにみえる場合がある。これはどういうことなのでしょうか。本文法では、これを省略(省力化)により生じた形式ととらえている。

24.2 「しないでいる／いた」が省略により「しない」に

「きのう、お酒飲んだ？」という過去の出来事に関する質問への否定回答は「いや、飲まなかつた。」が最も標準的なものであろう。が、一見現在のようにみえる

[A] 「いや、飲んで(い)ない。」

や、一見未来のようにみえる

[B] 「いや、飲まない。」

の形も可能である。これはなぜだろうか。

日本語に[66]という言及関係があることはすでに指摘したとおりである(17.2~3/23.3②)。これは過去の出来事を現在に関連づけて「している」の形で表現する言及関係である。日本語ではこの[66]を用いることによって、過去に関する質問に「している」の形で答えることが可能となっている。

[6⑦]きのうお酒飲んだ? → [66]うん, 飲んで(い)る。

[62]きのうお酒飲んで(い)た? → [66]うん, 飲んで(い)る。

[64]きのう着物着て(い)た? → [66]うん, 着て(い)る。

上の例は肯定回答の場合である。否定回答[否66]は 23.3 で見たように「していない否定」と「しないでいる否定」の二つの可能性がある。

[6⑦]きのうお酒飲んだ? ([62][64]は省略するが, 同様の扱い。)

[否66]いや, 飲んで(い)ない。(していない否定)

[否66]いや, 飲まないでいる。(しないでいる否定)

このうち「していない否定」の方はすなわち[A]で, 一見現在のようにみえるが, これは[否66]そのもので, 「飲む」行為自体は過去のものである。

[A]は[否66]であることを示せば説明できる。また, これがそのまま丁寧化されれば, 別の一見現在にみえる過去指向の形「いいえ, 飲んで(い)ません。」が生じる。

一方、「しないでいる否定」の方は, ふつうは省略しやすい「でいる」を省略して, 次のように言う。

[否66]いや, 飲まない(でいる)。(しないでいる否定)

ここから生じる一見未来のようにみえる形式がすなわち[B]である。

なお, この[B]の形は, しないでいる否定[否60]の省略として生じた形でもあります。

[否60]いや, 飲まない(でいた)。(しないでいる否定)

いずれにせよ, この「飲まない」が省略によって生じたものであり, 元来この形だけで過去を表すものでないことは, 文脈から独立した次のような文が非文となることから確認できる。

*私はきのうお酒を飲まない。

*彼女はおととい着物を着ない。

すでに質問の中に言及関係が示されており、回答の場合はそれを基準とした言及関係で答えてることが明瞭なので、省略できるものは省略してかまわないし、その方が自然だということにもなる。

「しないでいる否定」は[否66]や[否60]であることが明確なときは、省略しやすい「でいる」「でいた」が省略されて「しない」のみになる。ここから、一見未来のようにみえる過去指向の形が生じるのである。

[6◎] ハワイへ行った？

[否66] いや、行かない(でいる)。

[否60] いや、行かない(でいた)。

[B]は以上のように考えることにより説明が可能となる。

また、「しないでいる否定」は[否00]で使用される場合もある。この場合にも、質問への回答であるような、[否00]であることが明確なときは「でいる」が省略されて「しない」のみになる。ここから、次の下線部のように一見未来のようにみえる現在指向の形が生じる。

[22] 「今、お酒飲んで(い)る？」

[否00] いや、飲まない(でいる)。(しないでいる否定)

[44] 「うちの子、帽子かぶって(い)る？」

[否00] いや、かぶらない(でいる)。(しないでいる否定)

なお、「しないでいる否定」では、省略による「しない」だけの形が丁寧化される場合があり、その場合は[否66][否60]も[否00]も「しません」(いえ、飲みません／かぶりません)となる。これも一見未来のようにみえる過去指向、現在指向の形である。

※文末省略の他の例：「(これを)くださいませ」では「ませ」が命令形で依頼を表しているのであるが、これを省略して「(これを)ください」とするのがふつうであり、このとき連用形があたかも依頼を表しているかのようになる。37. 7◎, 39. 7②参照

24.3 「しませんでした」が省略により「しません」に

[6⑩] きのうお酒飲みましたか？

この質問に対する標準的な否定回答は

[否6⑩] いいえ、飲みませんでした。

であろう。ところが回答では言及関係の基準がすでに明瞭なので、省略できるところは省略してしまうのがふつうである。それで、省略しやすい「でした」が省略されて、ごく自然にこう答えることになる。

[否6⑩] いいえ、飲みません。

もちろん「飲みません」にもともと過去を表す用法があるのでないことは、文脈から独立した次のような文が非文となることから確認できる。

*私はきのうお酒を飲みません。

*彼女はおととい着物を着ません。

「しませんでした」の「でした」が省略されて「しません」となり、一見未来にみえる過去指向の形が生じるのである。

同様にして、一見現在にみえる過去指向の形も生じる。

[64] そのときお酒を飲んでいましたか？

[否64] いいえ、飲んでいません(でした)。

以上、このようにして、一見非合理と思われるものでも、それを言語表現につきものの省略(省力化)の結果生じたものであるととらえることによって、その背後に論理性の貫いていることを確認することができる。

次に、よく問題にされる「ご飯食べた？」への否定回答に関して、以上のような考え方で扱うとどのようにとらえられるようになるのかについて示してみたい。

第25章

「ご飯食べた？」への否定回答

25.1 3通りの否定回答

「ご飯食べた？」という質問に対する否定回答には3通りの可能性がある。

- [C] 「いや、食べなかった。」
- [D] 「いや、食べて(い)ない。」
- [E] 「いや、食べない。」

これについて考えてみたい。

「ご飯食べた？」は[4◎]か[6◎]，あるいは[43]か[63]の言及関係での質問である。[4◎][43]であれば，ご飯を食べた結果の状態(満腹状態)が残っていると想定されるときの質問であり，[6◎][63]であれば，そのような結果のすでに残っていないと想定されるときの質問である。([5◎][53]は結果の状態の完了するときの質問であるので，「着る」のような，結果の状態<着衣の状態>の完了<脱衣>がいつ生起するのかが明瞭な動詞では可能であるが，「食べる」のような動詞では可能性は低い。満腹状態が完了する時点[50]がいつであるかを特定しにくいからである。)

[4◎][6◎]の質問に対する回答であるなら，そういう出来事が生起しなかったことを答えればよいのだから，[否4◎][否6◎]（「いや、食べなかった。」）でよいであろう。[43][63]の質問に対する回答であるなら，その出来事が完了しなかったことを答えればよいのだから，[否43][否63]（「いや、食べなかった。」）でよいだろう。つまり，食べた事実の有無を尋ねている場合の回答は，[C]「いや、食べなかった。」でよいはずである。

しかし，[4◎][43]の質問では，質問の意図としては，食べた事実の有無

よりも、食べた結果、現在満腹状態であるかどうかを尋ねることに比重がある場合がある。その場合は現在のお腹の状態に关心がある。発話意図としては[44]「ご飯食べて(いる?)」なのである。これに対する回答は、現在のお腹の状態について答えるのが自然である。「食べなかった事実」を答えるよりも、「食べなかった事実」のために生じている「現在の空腹の状態」について答えた方が質問意図に合致するわけである。[C]「いや、食べなかった」より、[否44][D]「いや、食べて(い)ない」の方がより適切だということになる。

また、[D]の「～ていない」形式は、すでに生起したと予想される出来事が実はまだ生起していないことを表明するニュアンスをもつ(23.3 ①)ことから、その出来事が遅れてこれから生起する可能性のあることもニュアンスに含んでいる。(このことは、こう表現することもできる……[否44][D]「いや、食べて(い)ない」は、[44]「食べている<満腹状態>」を否定しているので、現在お腹がすいている状態であることを暗示し、したがって、これから食べる必要があることをニュアンスに含んでいる。)

[43]の質問ではあっても、質問の意図を考慮すれば、[否44]で答えた方が自然なのである。

それでは、[E]「いや、食べない。」はどうなのだろうか。

これは 24.2 でみたとおり、省略により生じている形である。何が省略されたのかによりニュアンスが変わってくる。

[否00] わたし、食べない(でいる)。

であれば、これから食べるつもりがあるようだから[D]に似ているし、

[否60] わたし、食べない(でいた)。

であれば、その後で食べるつもりもあったような過去の否定であるし、

[否66] わたし、食べない(でいる)。

であれば、単に過去の否定である。

この、後の二つ、[否60][否66]は[C]に似ている。

このように、[E]「いや、食べない」は「ご飯食べた?」への回答として

第25章 「ご飯食べた？」への否定回答

は、言及関係が基本的に三つあり、解釈の可能性が多い形式であると言える。

以上を整理すれば、「ご飯食べた？」に対する否定回答はこうなる。

過去のこととして答えるときは、

[C]「いや、食べなかつた。」あるいは[E]「いや、食べない。」

現在のお腹の状態として答えるときは、

[D]「いや、食べて(い)ない。」あるいは[E]「いや、食べない。」

つまり、[C][D]はどの場合に使うかが決まっているが、[E]はどちらにも使える形式なのである。

なお、それぞれはそのまま丁寧な形になる。

「ご飯食べましたか？」

[C]「いいえ、食べませんでした。」

[D]「いいえ、食べて(い)ません。」

[E]「いいえ、食べません。」

「ある」の否定は「あらない」じゃない？ → p. 248

「ではありません」と「ではないです」はどんな関係？ → p. 262

「ない」って、やっぱり3種類？ → p. 265

二重否定になると、なぜ不完全な肯定になる？ → p. 268

「これは私が買ったんじゃない」って、何を否定？ → p. 272

「完全に分からない」って、少し分かる？ → p. 286

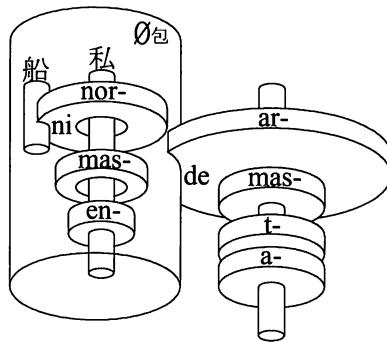
「全員来なかつた」って、来た人もいる？ → p. 287

「彼さえ」と「彼しか」はどう違う？ → p. 294

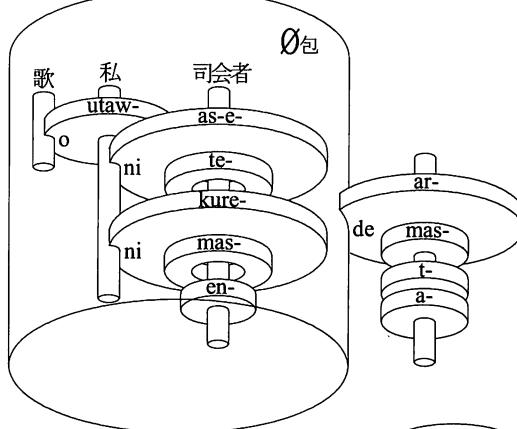
「行くことはない」って、「行く必要がない」？ → p. 298

「～ませんでした」(過去の丁寧な否定)の構造

船には乗りました。



歌わせてくれませんでした。



「ませんでした」基

